上の平

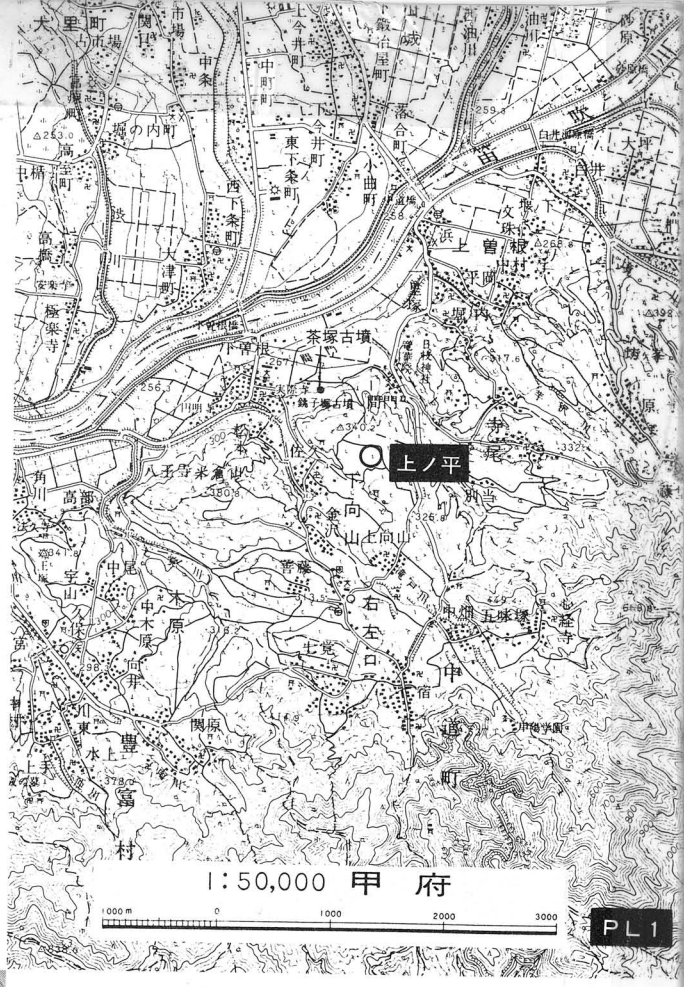
1980.3

山梨県教育委員会

はじめに

上の平遺跡の発掘調査は、山梨県教育委員会文化課が昭和54年6月から11月30日まで実施した。発掘面積は建設予定地内の約1万m²で、上の平遺跡の約3分の1を調査したことになる。調査区域の全域に方形周溝墓が確認されて墓域としての性格が与えられた。又出土土器が、弥生の最終末から土師器初頭の様相を帯びる事から、周辺の前期古墳との関連が注目されるに至った。

12月上旬には、一般公開を行い現地説明会を行ったが、5000人を越える人数が押し寄せた。一般公開後、降雪、霜による遺構の崩壊防止のため、調査を打ち切り全域を埋めもどし、仮保存処置を構じた。本概要は整理途中であるため、十分な検討を要したものではなく、不備な点が多々あるものと思われるが御容謝願いたい。



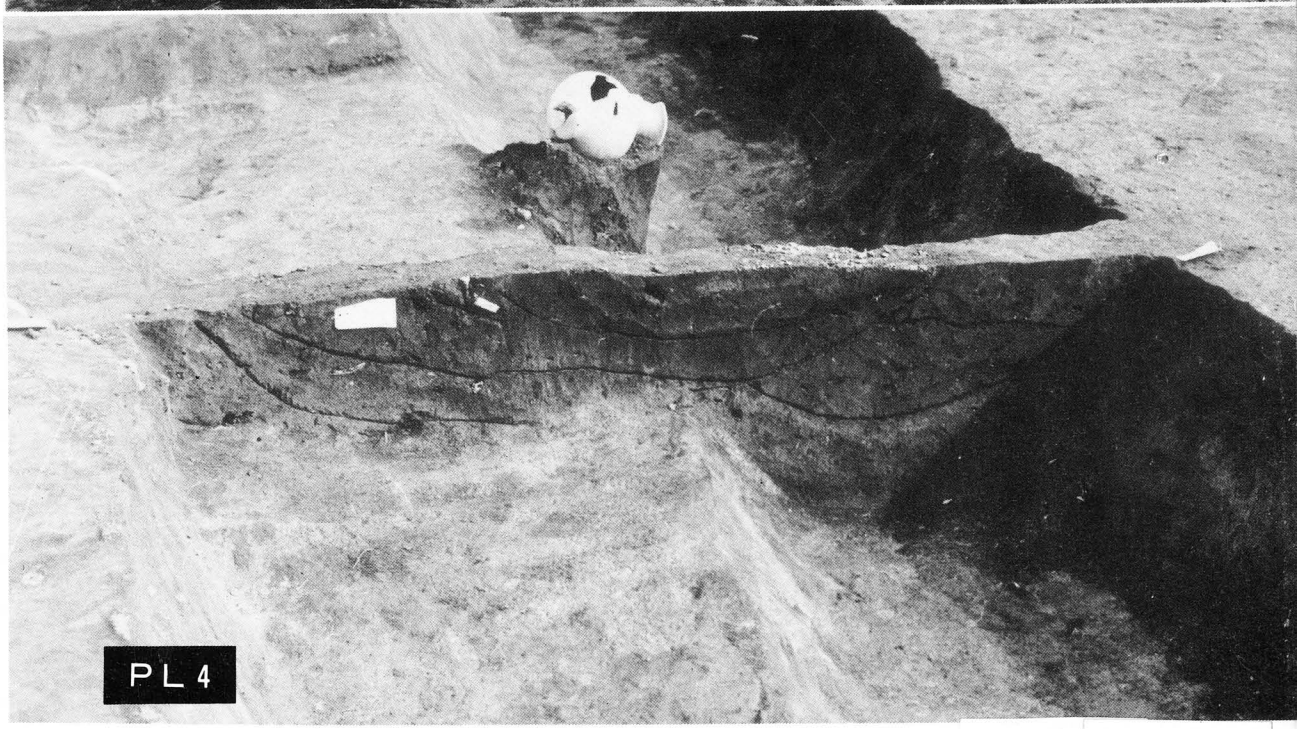
PL1

PL2

遺跡の地形と環境

上の平遺跡は、山梨県の中央部にある甲府盆地東南部に存在する曾根丘陵上にある。この曾根丘陵は御坂山塊よりテラス状に張り出した丘陵地帯の総称である。東西約12.5km、南北約3kmの広がりが認められる。標高は270～400mと一様ではなく、丘陵先端近くは東から坊ヶ峰、東山、米倉山、王塚等の高位段丘が存在し、この間を流れる河川により丘陵は分断されて、弥生から古墳時代の有力な生産基盤となった笛吹川氾濫原に至る。上の平周辺は「風土記の丘」建設予定地の名称が示すように、遺跡の宝庫として知られ、銚子塚古墳、大丸山塚古墳、丸山塚古墳、茶塚古墳が、上の平遺跡北方500mの丘陵斜面に占地する。この内の前期古墳（銚子塚、大丸山塚）は、畿内の有力古墳と同范鏡を分有することで著明である。上の平遺跡方形周溝墓群の存在の確認は、本県における古墳成立を解明する上で重要な視点となるであろう。

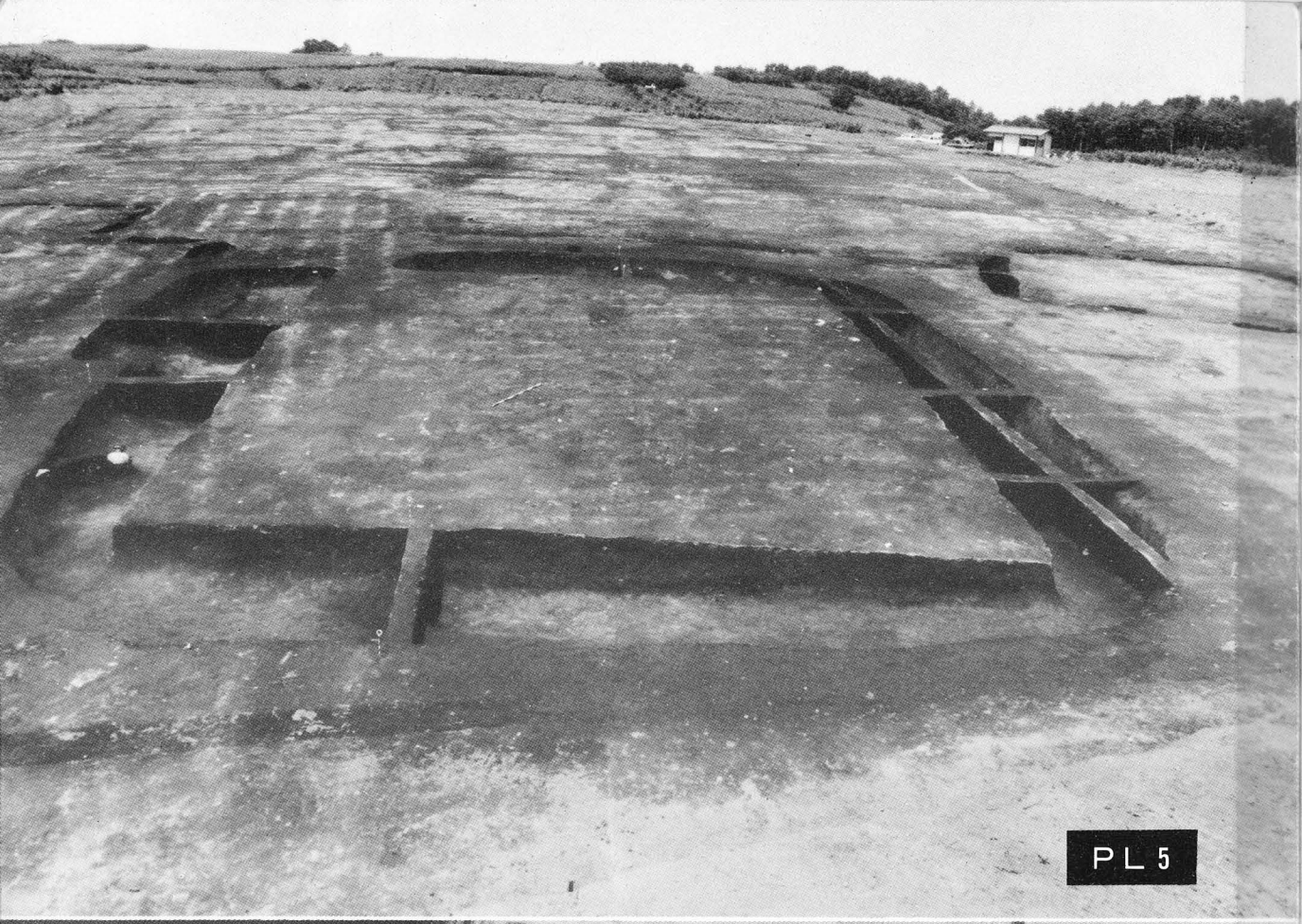
PL 3



PL 4

▶ＰＬ３は方形周溝墓群北端から、１号周溝墓方面を望んだ景観である。溝と溝
られるものの、方台部が他の周溝によって破壊される例はない。又墓域内には
られる。この空白部分を当時の人間が墓道としたという推察も可能であろう。

▶ＰＬ４は20号、21号の切り合い関係を示す。20号が21号の堆積土を掘り込んで



PL 5

PL 6

—1号周溝墓—

上の平周溝墓群中、最大の規模を有するもので、30m×20mを計測する。方台部は平掘であり、盛土は削平され、主体部は検出されない。

形態は長方形で北西部コーナーにブリッヂを設ける。ブリッヂ周辺での溝の巾は極端に広がり3mに達する。遺物は少なく西側溝中央部から、1個体の大形な壺が検出された。

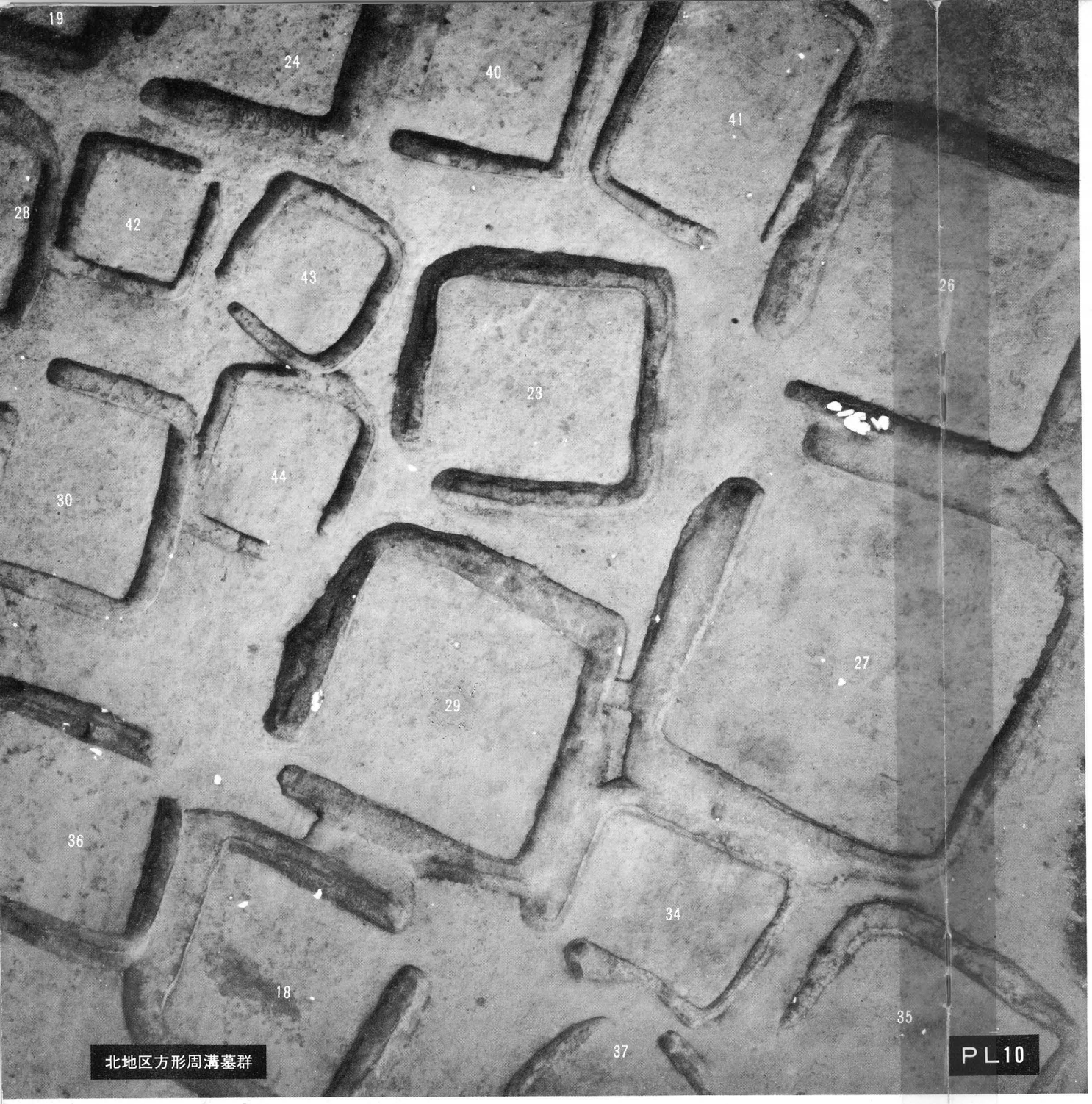
溝の中心より外側に検出され、溝底部より浮上している。東溝には、セクション・ベルトを縦方向に設け土層観察を行った。堆積土は、横断面はレンズ状に認められ、縦断面では、堆積土の掘り込みは認められない。方台部壁は直立するが外側ではゆるやかな傾斜をもって立ち上る。

壺は丹彩りで大形化しており、実用品とは考え難く供献用の性格が与えられる。上の平では溝と溝との切り合い関係は多いが、方台部に及ぶ例は認められない。1号周溝墓は55基中最も新しい時期に位置付けられるもので、周辺には周溝墓の造営がなされていたものと考えられ、その規格については、先行して造営された周溝墓の存在に規制を受けた可能性がある。PL5の上端では、土の色の変化で周溝墓の存在が密集して認められる。

PL 7

PL 8

PL 9



北地区方形周溝墓群

PL10

方形周溝墓群

北地区の方形周溝墓群を空から垂直撮影したものである。方形周溝墓のブリッヂの位置は一定方向を示していないが、ブリッヂの位置により、いくつかのグルーピングが可能かと考えられる。溝同志の切り合うものや、隣接する周溝墓は、溝の方向がほぼ同一方向にある状態を示す。これは、先に造墓されたものに後出のものが地形の関係から作用されたものと考えられる。これは、密集した周溝壁は、他の方台部を切らないといった事にも起因しているものとされる。大部分は切り合い関係を示すが中央の23号、下端の35号37号は独立した状態である。形態には正方形、長方形があり、又規模も大小がさまざまであり、複雑化している。

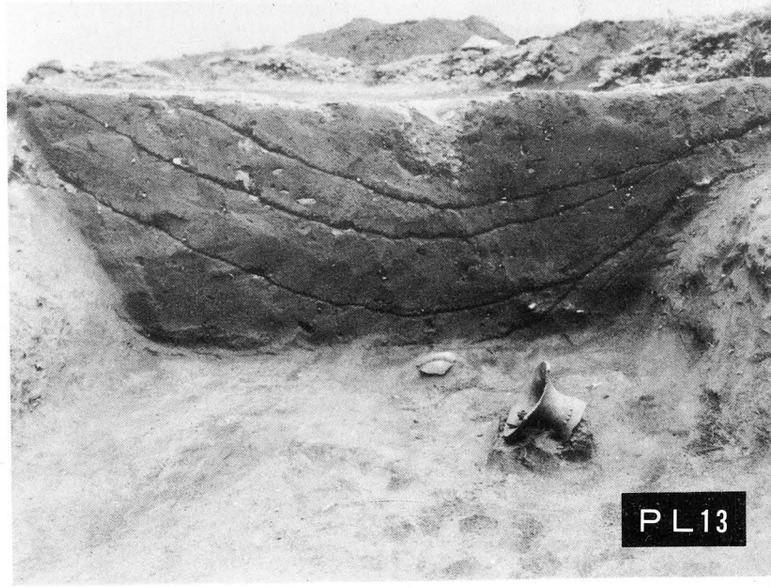
〈遺物出土状態〉

PL11

▶37号は南溝ブリッヂ寄りに検出された、長頸坩形の土器である。
周溝底部よりは浮上して出土しており、有機物の強い黒色土下層に位置している。底部は欠損して供献用の性格が強い。

PL12

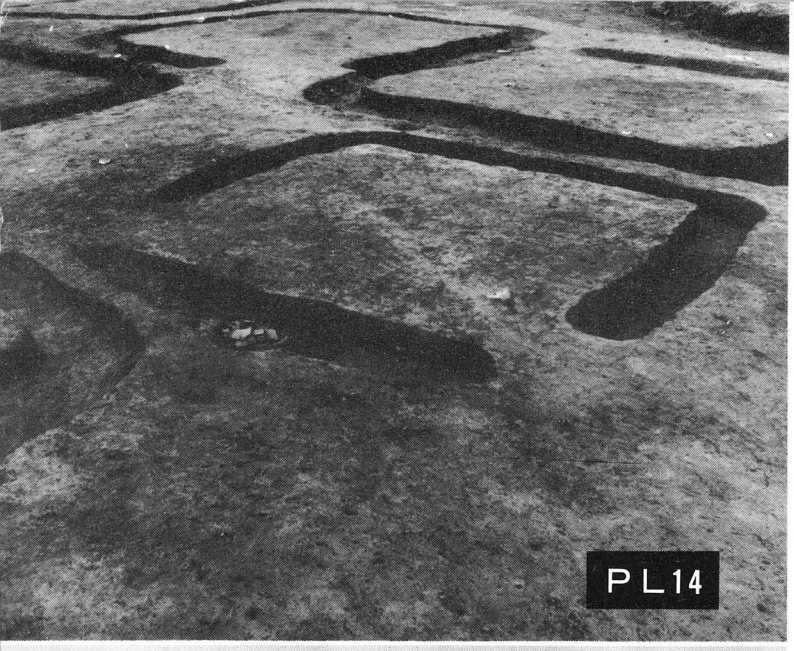
▶18号は、周溝墓確認面である黒色土層の上端より検出された。小形壺は丹塗りで完形に近いが、大形な壺は肩部以下が欠損する。
西溝のブリッヂ寄りに検出された。



PL13

▶20号は、西溝に検出されている。ブリッヂが南東に存在するため、出土位置はブリッヂとの関連は認められない。

肩部以下を欠損する土器は、他に同一個体の破片が一片も認められない点などから、土器が周溝内に投棄される以前に破壊されたものと考えられ、供献用土器としての性格が与えられる。



—周溝墓の形態—

上の平の方形周溝墓の大部分はブリッヂが一つでコーナーに設けられている。が、中には稀に二つ以上のブリッヂを設けるものも認められる。

54、55号、は1号東に存在しており、形態上では古い位置づけがなされる。

▶55号周溝墓はコの字型と棒状の溝との組み合せによって、ブリッヂは一方向のコーナーに存在する。大形な1号周溝墓の東側に存在する。今回、調査の終了した55基中小規模なものと言える。

▶54号は1対の方向にブリッヂを有するもので、カギ形の掘り込みを二つ組み合せた様相を示す。

▶方形周溝墓内出土の花粉

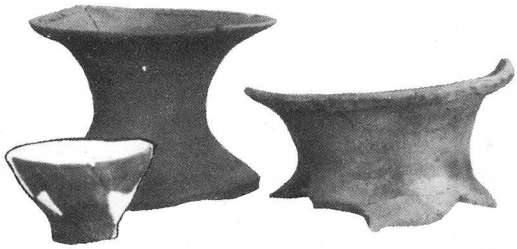
方形周溝墓の周溝内の土層からは多くの古代の花粉が検出される。今回提示したものはヒノキ科に属するものである。整理が十分なされていない現時点では多くのことは語れないが、キク科、モミ科の花粉等を検出している。

出　土　遺　物

出土遺物は、土器が全てである。器種の構成は、上の平遺跡が方形周溝墓といった墓域としての特殊性に支配されるものであろう。丹彩り土器が多く、壺形土器が他を圧しており、甕形土器の出土は少ない。大半の遺物は周溝内底面より浮上して検出される。出土位置はブリッヂ寄りに検出されるものとそうでないものがあり、バラツキが認められる。土器の編年的位置は、弥生町から前野町式段階の特徴を備え、地域色もあり、さらに整理途中でもある事などから厳密な対比は現時点では行えない。しかし、土器文様は、縄文が主体となる点が特徴であり、盆地南方の東駿河地方の縄文主体の地域と関連が深い様に思われる。

大形の壺

大形の壺



鉢及肩部以下が欠損する土器

小形の壺類

特殊な土器類

おわりに

方形周溝墓の研究は昭和39年、東京都宇津木遺跡での認識以来全国的視野に立つ集成作業が幾度も実施されて、関東、静岡、中部（長野）での発見が相継ぎ、調査例が東日本に多いことから東国で盛行する墓制とも考えられた。この様な中にあって、山梨県は東日本の方形周溝墓分布の空白部を占めてきた。しかし方形周溝墓の供献儀礼に関係する底部穿孔壺の発見例からも存在が予想され、その発見が待望されてから久しかった。本県における方形周溝墓の発見は、他県と同様、開発の波に拠るものであった。昭和49年、東八代郡一宮町田村遺跡を初現として、上の平遺跡で5例を数える。上の平遺跡の周溝墓群はその数からも、方形周溝墓の性格、社会構成に迫る重要な資料となろう。ここでは整理作業の緒に就いたばかりで成果を示す事はできないのでいくつかの課題となる点を述べておきたい。

方形台状部では上の平遺跡の場合耕作による攪乱のため直接盛土の存在は認められなかった。周溝の内側壁は直立する例が多く、周溝底部はローム・ブロックを含む土層のU字状の堆積が認められた。特に1号の様な大形の場合、現状でも1mを越す側壁が直立して続き、崩壊にさほどの時間は要さない。大形の方形周溝墓の例として時間的な差はあるが、埼玉県番清水遺跡例は周溝内側壁がゆるく傾斜し、むしろ外側壁が直立する部分が認められた。周溝掘削土の処置も含め、方形周溝墓の姿は発掘時とは大きく異なったことであろう。方形周溝墓の集合体としての墓域は何段階かの造墓の結果であり、調査時の姿が墓域の終末の様相であることから、墓域全体の流れをとらえる必要がある。重複の関係から、2・3の例を除き外側の大形例が他を切って新しい位置にあることが多く、中央部の小形のものから築造が開始されたことがうかがえる。ブリッジの位置は同じものが一定地域に集中して互いに重複し、時期差とするよりもむしろ系譜関係に連なるものと考えられる。密集した墓域内は墓道を中心に整然とした配列が見られる。

方形周溝墓の造墓パターンは①敷地の決定—②周溝掘削—③方形台状部盛土—④主体部掘り込み—⑤埋葬—⑥周溝埋没である。複数埋葬では④⑤が繰り返され、周溝埋葬があれば、上の平遺跡の場合周溝底面が平担であることから⑥段階にあたり、それぞれに対応する供献用儀礼と土器が存在するならば、土器型式の細分には出土状

況の詳細な把握が必要となろう。出土土器は、東駿河地方の諸型式と同じ特徴をもつものが認められ、当該地域との関連性がうかがえる。弥生後期の社会が農耕社会として完結した場合、不足する塩分は内陸部で得ることは困難であり、海浜の集団との交渉が当然予想される。海の幸を納めた壺が山麓を通り御坂の山を越えたことであろう。土器の胎土の分析比較作業が進めば、東駿河地方からの搬入品の存在の確認も可能となろう。

地域間交渉として注目すべき成果は、近年の纒向遺跡が上げられよう。同報告書では東海系の土器の存在から人的な移動をも想定して、東駿河地方の目黒身式は纒向II式（庄内I式）、曲金式、南関東の前野町式が纒向III式（庄内II式）に対比された。これによれば上の平遺跡の土器は土師器に属する部分が多くなる。東国から畿内への文化の伝播、人的交流また社会発展の不均等を考慮すれば、畿内で土師器と東国の弥生末期の土器が共伴してもよいことになる。しかし畿内から東国への文化の伝播が多くの時間を要さないとする最近の動向からすると、逆の場合にのみ適用できるかどうか、人的交流が古墳出現の技術的基盤となるものだけに重要な問題となろう。

古墳出現の在地的な発展の諸段階は、方形周溝墓成立の背景と想定された農業共同体の成立と展開の中で理論化されている。上の平遺跡に展開する周溝墓群は規模の差が著しく、世帯共同体家長層より傑出した、首長、族長層に想定される周溝墓は一般の家長層のそれより大形であろうとする理解は、上の平遺跡にも適応されよう。また首長、族長の専制化、世襲化の進行がついに古墳に至る権力を生じさせた道程も、大形周溝墓の中でも規模が増大し、ついには1号の様に平面規模に限れば古墳と大差ないものを出現させる背景として考えられよう。墓域が飽和状態で終末の様相を呈することは、これらに続く世代の墓域の検討を要する。

全長 100mをはるかに越す銚子塚古墳、大丸山塚古墳に続くとするか、その間に小形な前方後方墳・小平沢古墳を介在させるか、また曾根丘陵上に乗る未調査の小古墳中に求めるか解釈の別れるところである。この問題を解決するためにも、土器の編年的位置の確立と細分、墓域の造墓活動の流れの把握が必要となろう。前者は上の平遺跡のみで完結する問題ではなく、今後の成果を待ちつつ後者の解明を進めてゆくことが我々の課題とされよう。

（文責　　小林広和、里村晃一、出月洋文）